

# 九州病虫害防除推進協議会創立 50 周年記念に当たって

那の津会 佐藤 俊次

日本全国どこに行っても、否全世界中に拡散してしまった新型コロナウイルス COVID19 による感染は留まるところを知らず、我々人間を嘲笑うかのように、イギリス型、ブラジル型、インド型などの変異株までもが猛威を振るい、諸々の大会、行事などが延期・中止となっている現状に憂いを感じています。

令和 2 年 5 月に予定されていた九州病虫害防除推進協議会 50 周年記念講話会に、那の津会から 1 名講演の依頼がありました。50 周年記念誌の各編集委員から「冥途の土産に」と推薦され、記念誌の編集委員長として筆者が「50 周年記念誌刊行の取り組みと農薬連絡試験の思い出」と題して、5 月 14 日の記念講話会の演題に上がることとなりました。

ところが令和 2 年の新年早々から新型コロナウイルス性肺炎が各地に発生するようになり、福岡県をはじめ九州各県においても感染者数の増加がみられました。このような状況から九防協では開催時期を 10 月 16 日に延期、さらに令和 3 年 5 月に再延期。緊急事態宣言が出される中、5 月に予定されていた記念講話会・祝賀会の再延期開催を断念することとなった由の文書を 2 月 2 日に受け取りました。

私は講演の準備を一応はしていたものの、昨年 7 月からコロナ下で親戚や家族の不幸な出来事が重複し、気分的に講演に対する気力をすっかりなくしており、中止の文書を受け取った時は大変安堵したのが本心でした。

今年の 3 月九防協の堤常務からお電話で講演の内容を中心に九防協年報用原稿を依頼され、気持ちの整理はいまだつきませんが、「冥途の土産」にこの依頼をお受けすることといたしました。50 周年記念誌の内容と重複する部分がほとんどですが、50 周年記念誌刊行の取り組みと農薬連絡試験の思い出について述べてさせていただきます。

## 1. 九州病虫害防除推進協議会創立 50 周年記念誌刊行の取り組み

このことについては九州病虫害防除推進協議会創立 50 周年記念誌の編集後記に詳述してありますが、重ねて記させていただきます。

- ① 2015 年度那の津会総会で、九防協創立 50 周年の 2020 年に記念誌として発行することが決議されました。
- ② 2017 年度総会で記念誌のタイトルを「戦後九州における主要病虫害に対する取り組みの軌跡（Ⅱ）」とすることが決定され、私が編集委員長に、池田 弘氏が指名されました。

また特別会計を設け、那の津会会員の皆様から基金を募り、編集委員会

の開催経費などに充てることが決まりました。

- ③ 2018年度総会では、対象病害虫・執筆者を提案、了承されました。  
ついで、7月1日に那の津会として九防協山中会長へ刊行に係る経費などの負担協力をお願いし、了解をいただきました。  
7月6日に執筆者の方々へ12月25日までに執筆を依頼いたしました。
- ④ 2019年度には数回の編集委員会を開催し、各執筆者とのやり取りを行い、印刷の運びとなりました。
- ⑤ 2020年2月4日 印刷会社に発注することが出来ました。
- ⑥ 3月4日下落原稿の著者校正をお願いしました。  
3月26日の編集委員会で、著者校正された原稿の最終チェックを実施しました。
- ⑦ 執筆者、編集委員、那の津会会員各位の協力のもと予定通り2020年5月に発行することができました。この記念誌は創立記念日当日に皆様方に配布される予定でしたが、前述のように創立50周年記念式典が延期されたために、その機会を失ってしまいました。
- ⑧ さらに、令和3年5月に再延期されたことから、九防協のお計らいにより、令和2年9月に関係者各位に配布させていただきました。

本誌の発行に全面的にバックアップしていただきました九州病害虫防除推進協議会山中正博会長はじめスタッフの方々にお礼申し上げます。

また本記念誌の作成に当たっては、各編集委員の方々の努力もさることながら池田弘事務局長には40周年記念誌に続いて今回も精力的に編集作業全般を一手に引き受けていただきました。編集委員長として大変助かりました、感謝の言葉しかありません。ご苦労様でした。

私自身、50年にわたる九防協の各種の連絡試験が頭の中にあるわけではありませんでしたが、皆さんの原稿を読ませていただいたことで、大変勉強になり、また参考にもなりました。

現在10aばかりの家庭菜園で、孤軍奮闘しているのですが、毎年・毎年何等かの病害虫に悩まされて、今まで何の仕事をしてきたのか不思議でなりません。一人畑にたたずんで自嘲の毎日です。「立派な野菜が出来ないのに、もういい加減に菜園作りを止めたら」とあの世から妻が叫んでいるようです。

また、周囲の農家の方々からいろんな問題を持ちかけられ困惑の連続です。

このような時に大変役に立つのが、記念誌で取りまとめられている資料や連絡試験の数々です。

特に、ミナミキロアザミウマが媒介する黄化えそ病、果菜類病害・うどんこ病、灰色かび病、褐斑病の薬剤耐性菌、イチゴ炭疽病、トマト黄化葉巻病、ネギ類を加害するシロイチモジヨトウ、各種の農作物を加害するハスモンヨトウ、アブラナ科の大害虫・コナガ、トマト、キュウリ等に寄生する土壌線虫などの

項目は大変参考になっている現状です。

また、果樹類（ナシ・ビワ）白紋羽病に対してフロンサイドSCによる防除方法は、私の庭木や草花に発生した白紋羽病の防除に活用させていただきました。

この項目は、野中福次元九防協会長の鶴の一声で現地検討会が開催され、各県の担当者が参加、膨大な研究成果が現場に普及したとの記述は、那の津会野田前会長の意向に沿った内容であると考えています。故野田前会長は大変喜んでおられることでしょう

## 2. 農薬連絡試験の思い出

九防協の連絡試験・日本植物防疫協会の委託試験を実施しながら県独自の試験研究を行っているのが私達の現役時代の姿であったと考えます。その中で大分県農業技術センター植物防疫部では1971年オリゼメート粒剤を用いて、いもち病の防除試験に取り組んだ。この試験を企画・担当したのが故富来 務病虫科長でした。この年はいもち病の発生も多かった上に、白葉枯病の発生も常習発生地のみならず、県下全域に多発生圃場が認められた。農業技術センターのいもち病試験圃場の中に、白葉枯病発生が少ない区が点々と見られるのにいち早く気がつかれたのが担当者であった故富来病虫科長でありました。このことがイネ白葉枯病とオリゼメート粒剤の出会いであり、この時の写真が次の一枚であります。50年もの時を経てすっかり色あせてしまいましたが、貴重な写真であると自負しているところです。またこの年の試験結果を次の二つの表に記すことにします。1971年から1975年まで5年間白葉枯病とオリゼメート粒剤との関係試験に取り組み、その結果を1976年宮崎県で行われた九州病害虫研究会で発表させていただきました。

この大分県の結果を踏まえて、九州各県で、九防協の連絡試験、日本植物防疫協会の特別委託試験が実施され、1980年にオリゼメート粒剤がイネ白葉枯病の育苗箱及び本田期処理について適用拡大登録されることとなりました。これらの詳細については、記念誌の筆者の白葉枯病の項を参照いただければ幸いです。



イネ白葉枯病とオリゼメート粒剤との出会いの現場写真(1971)

イネいもち病に対するオリゼメート粒剤の効果 (1971)

供試薬剤	処理月日	穂いもち発病穂率 (%)		薬害
		穂首いもち	枝梗いもち	
オリゼメート粒剤 4 kg/10a	7/7, 8/7	2.4	15.2	—
	7/7, 8/14	1	15	—
	7/7, 8/21	1.7	12.6	—
オリゼメート粒剤 5 kg/10a	7/7, 8/7	2.3	14	—
	7/7, 8/14	1.7	12.7	—
	7/7, 8/21	1.6	12.8	—
キタジンP粒剤 4kg/10a	7/26, 8/24	0.3	10	—
無処理	—	5.2	33.2	

イネ白葉枯病に対するオリゼメート粒剤の効果 (1971)

供試薬剤	処理月日	白葉枯病	
		発病葉率 (%)	発病度
オリゼメート粒剤 4 kg/10a	7/7, 8/7	74.0	37.8
	7/7, 8/14	72.0	34.1
	7/7, 8/21	76.3	31.3
オリゼメート粒剤 5 kg/10a	7/7, 8/7	76.7	34.0
	7/7, 8/14	79.7	37.9
	7/7, 8/21	73.0	34.7
キタジンP粒剤 4kg/10a	7/26, 8/24	96.7	75.7
無処理	—	99.3	74.8

3. おわりに

家庭菜園での私の体力も限界に近づきつつあることを実感していますし、この原稿を書いているパソコンもなかなか言うことを聞いてくれなくなりました。今更新品のパソコンの購入とは考えられませんが、ここらが潮時かなと考える毎日です。

それでも病害虫には生きがいを感じますし、ひそかに家庭菜園や周囲の野菜畑を見ながら標本を採集し、試験場の実験室をお借りし、顕微鏡を覗いている今日このごろです。

九防協の皆様方、那の津会の方々いろいろとご教示・ご指導を賜りありがとうございました。  
(2021年5月12日稿)